

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第156号 [2018年2月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章 22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第156号をお送りします。今月は、ウィーンの緒方姉よりたくさん的高原剛一郎師のメッセージ CD をいただいたこと、プラハからご来訪くださった鮫島姉が高原師のメッセージをととても尊敬していることから、高原剛一郎師のメッセージを皆で聞く機会としました。ただ、鮫島姉は最近のメッセージはほとんど聞いてしまっておられたため、2011年に語られた『人を立たせる力』と題されたメッセージに、一同で耳を傾けました。

『人を立たせる力』

高原 剛一郎師

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。(コリント I 13:13)

信仰とは、信頼と言い換えることができます。日本人は特に、神なんか頼らなくても自分の力で人生を切り開けると考える人が多いですが、命に不可欠な酸素さえ無料で神がいただいている立場上、それは滑稽なほど傲慢な考えなのです。

以前私はカナダへ招かれ、ある日本人のお宅に泊まらせていただくことになりました。が、渡航直前にカナダでインフルエンザが猛威を振るい、抵抗力の弱い私は渡航を深く悩んでしまいました。そして受け入れ先のご家庭に何度も問合せでは「大丈夫、気にすぎだ」と励まされたのですが、私は引き続きよく悩んでいました。すると業を煮やして「心配無用。かかったら私が責任もって介抱しますから」とドンと背中を押してください、私はようやく行く決心ができました。なぜ私は決心することができたのでしょうか。それは、彼が医師だったからです。病気になっても医師のもとに身を寄せるのだから大丈夫だという信頼を持てたからなのです。

神を信頼することと人を信頼することは違いますが、私たちの人生には本当に多くの困難があります。しかしその人生を絶対的に間違いのない方に信頼する時、それは人を立たせる力になります。

ところで人はいずれ死に、死後に裁きを受けることになっていますが、清くないと天国には入れません。神などいらないと考え、神から離れてしまうことをキリスト教では罪といいますが、こうした人と神との間にある隔たりはとてつもない。しかもこの距離を埋めるには、人の罪を除去しなければいけないのに人にはそれができません。では人が天国に入れる可能性はないのでしょうか。否。神はその距離を埋め、人が神の国に入ることができるように私たちの方へと歩み寄ることを決心され、御子キリストが送られて人の罪を負い、十字架刑を受け、罪を帳消しにし、3日目によみがえることによって福音が本物であることを立証されたのです。神は罪ある私たちに、天国に入る扉を開くために来てくださった方。死んでも、神が私たちを天国に迎える準備を完了しておられるという、失望に終わらない希望を主イエスは提供してくださっているのです。

最後に、神様はあなたにとって愛です。この事を伝えるために神はその独り子イエスを地上に送って下さいました。しかも、私たちの所へ来られた神は、神だからといって人に対して力をふるい、難しい言葉で語り掛け、結局人に愛されない独裁者のような態度はなさいませんでした。主は泣き、うめき、血の汗を流し、ひたすら働き、人のために祈り、愛し、あなたの罪を除去するために処刑されていくほど身を低くされたのです。しかし私は、このキリストの十字架の様子を敗者の姿と受け取り、「神なら圧倒的なパワーを見せつけたらいいでないか」と意見するのをいままで数多く聞き、読むことができました。でももしキリストがそのような態度をとったら人々はおびえ、彼の愛を受け取ることはできなかったことでしょう。キリストは本気であなたを愛し、本気であなたの罪をぬぐい、本気であなたが天国に入ってきてほしいと願われたからこそ、弱い立場を貫かれたのです。

あなたの人生がこれほどまで神に愛され、これだけ大きな犠牲の上に成り立っているのであれば、この人生を無駄にはできないと思いませんか。この方を救い主として受け入れ、信頼し、完全な希望をいただき、何があっても神の愛のただなかにあるという確信を持って歩むとき、私たちは人を立たせる力を持つのです。

